新春座談

観光立市郡上の実現を目指して

観光立市郡上を政策推進の旗印に掲げて３年目に入りました。今月号では、新春を迎えそれぞれの立場で「観光立市郡上」の実現に向けて活動している３人の市民をお招きし、市長と「新春座談会」を行っていただきました。

協力：郡上市市民協働センター、（財）郡上八幡産業振興公社

【市長】 みなさん、新年あけましておめでとうございます。今年は、平成から新たな元号へと変わる歴史的に意味のある年だと思います。そんな新春に、市内の様々な分野で活躍される若いみなさんに夢を語り合ってもらおうと木村聖子さん、後藤正和さん、末松佳子さんに集まっていただきました。

木村さんはゲストハウス「まちやど」をやっておられるということで『泊める』というお仕事ですし、後藤さんは「奥美濃カレー」のプロデューサーであり「踊りしるこ」の若主人ということで『食べる』というお仕事ですね。そして、末松さんはカヌーの選手ですので、これは『遊ぶ』と言うと語弊がありますが、『アクティブ』と言ったらいいかもしれません。泊める・食べる・遊ぶ、あるいはアクティブで『るるぶ(ブ)』になります。某社の旅行雑誌に『るるぶ』というのがありますが、こちらのほうは、見る・食べる・遊ぶ、だそうです。今日は郡上の『るるぶ(ブ)』ということで楽しいお話を伺えればと思います。

まず、みなさんに、出身と、郡上に来られるまでにどんな仕事や活動をされていたかということ、そんなみなさんがなぜ郡上へ来られたか、なぜ帰ってきたかということをお話しいただければと思います。まずは木村さんからお願いします。

いろいろな経験を経て郡上に定着

【木村】 私は、青森県の六ケ所村の生まれです。実家は魚屋をやっていたので、田舎ですがいろいろな人が往来するような地域にいました。田舎が嫌いで、若いときはとにかく早く家を出たかったんです。高校も実家から通えないところをわざわざ選びました。高校卒業後は、東京にあるファッション関係の専門学校に入りました。事情もあって結局ファッション関係の夢は諦めたのですが、一度は日本から出てみたいなという思いがあったのでアルバイトでお金を貯めて25歳から2年間イギリスで暮らしました。帰国後、福祉系の住宅改修だとか、住環境コーディネーターなどの仕事をしていましたが、その後沖縄での生活を経て、もうちょっと他の場所も見てみたいなと思い郡上に来たという感じです。

【市長】 沖縄から直接郡上へ来られたんですか。

【木村】 たまたま郡上で社員寮のある自然体験スタッフの仕事がありまして。ちょうど10年前です。

【市長】 後藤さんはどうですか。

【後藤】 僕は八幡の橋本町の生まれなので、生粋の町っ子です。高校まで郡上にいました。

音楽一家だったこともあり、音楽をやりたい思いと、東京への憧れもあって、国士舘大学へ進みました。大学では歴史を学びました。新しいものとか、新しいカルチャーも好きでしたので、学生時代はDJや音楽イベントを仲間たちとプロデュースするなど、このときに後々の仕事の土台も作ったという感じです。

卒業後、東京で旅行会社に就職しましたが、元々郡上が好きということと、家業を継ごうと決めていたので一度郡上に戻りました。その後、岐阜市にある和菓子屋さんで4年間修業し、再び郡上に戻りました。帰ってからは、郡上から全国へ音楽を発信するエンジョイントという会社を立ち上げ、自分たちの音楽レーベルも作りました。

【市長】 それでは末松さんにお願いしたいと思います。

【末松】 私は八幡町吉野の出身で、ごく一般的な家庭で育ちました。子どものころから体を動かすことがすごく好きでした。高校卒業後、中京

女子大学に入りました。今は至学館大学となりレスリングが有名です。大学では、いろいろなスポーツに触れてみたかったので、テニス、ゴルフ、エアロビにバスケとかもやりました。

大学時代に一度、美並のラフティング会社でアルバイトをしました。その縁で卒業後、とりあえず帰って来てラフティングの仕事に就き、そこでカヌー競技に出会ったんです。仕事の合間に練習をして、しばらくやっているうちに競技にも出られるくらいのスキルが身に付きました。

２０１４年にワールドカップで金メダルを取り、競技に理解のある美濃市と岐阜市の会社に勤めましたが、なかなか競技と仕事を両立させることは難しく、郡上に帰って来ました。

カヌーという競技自体がとても小さい市場で、競技ルールも特殊です。

地元の人にもっと知ってほしいという思いもあったので、白鳥の阿多岐ダムでカヌースクールを始めました。今はスクールで初心者から上級者まで育てられるような環境が作れたらいいなと思っています。

【市長】 みなさんのお話しを聞きますと、いろいろな体験・経験をし、現在郡上で活躍の場を見つけていらっしゃることが分かります。

外を見て郡上の魅力を再発見

私の自己紹介ですが、私は大和町で生まれて高校まで郡上にいました。私が郡上高校に入ったのが昭和34年です。その年をなんで覚えているかと申しますと、伊勢湾台風があった年なんですね。大学卒業後、公務員になりまして、その後の勤務場所は愛知県庁や、東京での国の役所、あるいは群馬県庁など、いろいろなところを行ったり来たりし、昭和58年に岐阜県庁へ来ました。そこで60歳まで勤め、平成20年に郡上に帰って来ましたから、ちょうど満10年が過ぎたということになります。

岐阜県庁勤めのときは岐阜で借家住まいをしながら、土日は郡上へ帰って来てましたので、IターンUターンとかの言い方をするとJターンですね。

みなさんは、自分のやりたいことか、やれることとかを求めて、今郡上にいらっしゃると思います。木村さんにとっては全く新しいところへ来たことになりますし、末松さんと後藤さんにとっては帰って来たということになるんですけど、それぞれいろいろな経験をして、いったん郡上を離れた後、あるいは、木村さんの場合は外国も含めていろいろなところをまわられて、郡上に定着しておられるわけです。郡上へ来たとき、郡上に帰って来たときの郡上の印象をお聞かせいただけませんか。

【木村】 私は、職場がメタセコイアの森でしたので、仕事場も社員寮も森の中なんですよ。郡上の印象は「自然」そのものという感じでした。その後、市内でUターン者など、友達がたくさんできたんです。そこで郡上は、なんて郷土愛を持っている若者が集まる場所なんだという印象を持ちました。

ちょうど地域おこし協力隊の募集があったので応募し、郡上に生活の軸を置くことになりました。

協力隊が始まる前に一カ月ほど東京に滞在していたとき、東日本大震災が起こりました。スーパーから食べ物が全部なくなっちゃって、お金があっても物が買えないし、みんなパニックになって我先に米とか水とかを買っていく姿を見て、都会はもろいものだと感じました。その時点で郡上に根をはろうかなと考えました。

【市長】 震災がなかったなら、木村さんの人生も変わっていたかもしれませんね。

【木村】 もしかしたらそうですね。

【市長】 それでは後藤さんはどうですか。あなたの場合は東京にいて、いったん帰って来て、それからまた岐阜へ行って、そういう意味では2回帰って来たような感じですけど。

【後藤】 外に出て行くことによって、郡上の良さが再確認できたと思います。豊かな食があり、きれいな水があり、美しい山があり、空気もいいです。帰ってきたときに車で郡上中を回り、こんな郡上があったのかとか、これは観光にいいなとか、こんなふうに見せたらいいんじゃないかとか、いろいろ考えました。でも、商店街などは衰退していて、厳しいだろうなとか、そういうことも感じましたね。

【市長】 外を見てきて、郡上の良さを再確認するとともに、進行しつつある過疎化とか人口減少とか、いろいろな意味で厳しいということを思われた。それから郡上育ちだけど、郡上にいながら郡上のことをそんなに知らない、再発見というよりは新発見された面もあったということですね。

末松さんはどう思われましたか。

【末松】 岐阜市に住んでいて郡上に戻ろうって決めたのは、岐阜市って郡上からすごく遠いわけではないのに、郡上と比べて自然が少なく、道路と車と建物ばっかりです。仕事はたくさんあったんですが。

郡上の良さは一度出てみないと分からないと思います。戻って来て改めて本当に良いところだなって思いました。あと、戻ってきたら知らないうちに町に新しいお店ができ始めていて、みなさん頑張っているんだなって感じました。

【市長】 私の経験から言うと、東京以外に群馬県の前橋市に住んでいた時期が6年半くらいあったので、岐阜県に戻ってきたときはよその素晴らしさを見た上での、やっぱり郡上はいいよなという感じでした。

みなさんがおっしゃるとおり、郡上の人って結構郡上愛が強いというか、そういう気持ちが強い人がいっぱいいるなという感じが私もします。

役割を持って 郡上市づくりに貢献

次に、みなさんが今やっていることについて、どんな思いでやっているのかなど、今のお仕事、現在の活動についてお聞かせください。

【木村】私は今まで下宿とかハウスシェアとかで、住むところに困ったことがなかったのですが、郡上では初めて住む家がないという状況に遭いました。

郡上で暮らしたいという人がたくさんいるはずですが、住む家がないとなると先がつながらないですよね。そこで、ゲストハウスという形で「まちやど」を開業しました。2年前からは女性客に特化した宿にシフトしています。

現在、別物件を取得し改修しています。地域の人をつなぐ場所にもなれたらと準備をしています。

【市長】「まちやど」では最初、誰かシェアする相手がいればハウスシェアして住むようなことを考えていたのですか。

【木村】そうですね。

【市長】実態として、例えば郡上で、相当長期間滞在する人もいるんですか。何ヶ月という単位で。

【木村】何ヶ月という単位で住むのは少なくて、家が見つかるまでに2週間とか、年に何回か滞在して住みたいとかですね。

【市長】それでは後藤さんはどうでしょうか。

【後藤】みなさんに僕のやっていることをお話させてもらいます。正和堂の他に有限会社エンジョイントという会社をやってまして、デザインやウェブ制作、印刷等をやっています。また、音楽事業としてはイベントのプロデュースや音響をやらせていただいています。

奥美濃カレーでは事務局とプロデュースをやっていまして、新しいパッケージデザインも手掛けました。奥美濃カレーにはベーシックな奥美濃カレーがなかったので考案し、ちょっと普段より贅沢なカレーという設定で作りました。

【市長】パッケージだけではなく奥美濃カレーそのものもですか。

【後藤】そうです。また今年から、郡上北高の観光ビジネス科と連携して奥美濃カレーを通じて市全体のプロデュースができないかと考えているところです。明治大学とは奥美濃カレーを通じて12年ほど前から付き合いがありますので、奥美濃カレーをはじめ、東京でどのようにして郡上を売っていくかを考えています。

【市長】家業のほうはどうですか。

【後藤】家業のほうはですね「踊りしるこ」を僕が全部作っています。本当は店構えとかも変えたいんですけど、住居と店舗がいっしょですし、父親の介護もしながらですので、どうするか検討中です。

【市長】正和堂でお作りになっている菓子は銘柄的に「踊りしるこ」のほかに、最中とかあるんですか。

【後藤】あったんですけど、今は止めています。過去やっていた商品もまたリニューアルして出そうと思っています。

【市長】末松さんはどうですか。郡上での活動状況など、先ほども少し話されましたが。

【末松】今は練習よりも今年の競技活動に向けての準備の段階です。自分の選手活動のマネージメントも全部一人でやっているんです。ありがたいことにピノキオ商事株式会社さんとは継続契約ができましたし、キャプテンスタッグ株式会社さんから商品提供などを受けることになりました。また、アメリカのワーナーパドルさんからインターナショナル契約と言って、チームワーナーというパドルブランドの国際的なチームに入ることができました。

昨年、相生小学校のプールでカヌー体験会をやらせていただき好評だったので、今年は他の学校でもやらせていただきたいと思っています。

カヌーフリースタイル競技がもっと広がっていくように、自分が今できることをやっていきたいです。

【市長】これからの郡上をこんな

座談会に参加いただいたみなさん

◀ 木村 聖子さん ▶

八幡町在住。2010年郡上市に移住。2014年に八幡町でゲストハウス「まちやど」を開業。新しい暮らし方や働き方を提案しつつ実践中。

◀ 末松 佳子さん ▶

八幡町在住。2009年～2018年カヌーフリースタイル日本代表。2018年スペインソートで行われた2018ICFカヌーフリースタイルワールドカップの金メダリスト。

◀ 後藤 正和さん ▶

八幡町在住。和菓子修行を経て郡上にUターン。正和堂（「踊りしるこ」製造）店主。奥美濃カレーやイベントプロデューサーとしても活躍中。

地域にしたいという思いと、その中でみなさんがやっている活動を通してどんな役割を果たしていきたいか、そんな思いを話していただければと思います。

【木村】暮らすということの価値観や概念が変わってきているなという感じがあります。その中で、生活の拠点の一つが郡上にあるという暮らし方を提案していけたらと思っています。

座談会は、八幡市街地で（財）郡上八幡産業振興公社が運営するゲストハウス「襄荷渓房（じょうがけいぼう）」で行われました。

【市長】ありがとうございました。後藤さんはどうですか。

【後藤】僕は市民協働センター運営委員をやらせていただいていますし、青少年育成にも関わっています。ですので、住民自治や市民協働を実践しながら子どもたちに伝え、自分たちの町を自分たちで育てていくことができればと考えています。

【市長】末松さんはどうですか。

【末松】これからは郡上に海外からたくさん人が来るようになると思うんです。観光だけではなく実際に郡上に住んだりとか。海外の人と交流する場面もどんどん増えるような気がします。カヌーを通して長良川の素晴らしさなどを伝えたいです。

【市長】今までいろいろなことを語っていただきましたが、２０１９年の目標をお願いします。

【木村】今、二軒目の宿を改修しています。二軒目に関しては、大衆食堂プラス八百屋で上が下宿という形でやっていこうと思っているんです。世代間の交流や家族の枠を越えて交流が生まれるような場所になればと思います。

【市長】今の「まちやど」とは一味変わった機能を持ったものをやってみたいということですね。後藤さんはどうですか。

【後藤】自分たちの人間力で、観光の顔として、その個人に会いに行きたいと思えるような活動ができたらと思います。心の部分が大事だと思っているので、そんな自分になりたいですし、仲間と一緒になってまちづくりなどに関わりたいです。

いっしょになって行動する年に

【市長】末松さんの今年の目標はどうですか。２０１９年も海外での競技参加はあるんですか。

【末松】２０１９年は世界選手権が昨年と同じスペインのソートで開催されます。前より参加国も増えて参加選手も多いので競争も激しくなります。そこで自分の納得がいく成績を残したいことと、昨年始めたカヌー体験会の参加者を増やして、大勢の人にカヌーを楽しんでいただきたいなと思っています。また、郡上でカヌースラローム競技が開催できないかと考えています。

【市長】最後に私からのリクエストですが、郡上の場合、高校を卒業すると、多くの人が勉強や就職でいったんは市外に出ていきます。郡上で育った人たちがいろいろな経験を積んで帰って来て活躍してほしいと思います。高校生やこれから新成人になる郡上の若い人たちにメッセージをお願いします。

【木村】郡上は全国的に見ても面白い人が集まっていて、地元の人、移住した人を含めて、これだけ多様な分野で活躍している人がいるところはなかなかないと思っています。これから就職なり進学で郡上を出られるのであれば、郡上にいる間に、そういう人と話す機会や会う機会を持ってほしいですね。そして積極的に視野を広げてほしいです。そういう視野を持って外に行ったら違う形で郡上が見えてくると思うので、きっと帰って来たくなると思います。

【市長】後藤さんはどうですか。

【後藤】郡上に家があること自体が自分にとってメリットだということを認識してほしいですね。いつでも郡上に帰れることはすごいことだと思うので、郡上という拠点を認識しながら外で選択肢を増やしてほしいです。選択肢を増やした上で、郡上を選んでほしいですね。自分たちで郡上を作っていこうという若者が増えてほしいと思います。僕は郡上の子どもたちを信じています。

【末松】私も外に出ていろいろな経験をしたことで、郡上の良さが分かりました。外に行かないと学べないこともあるので、好奇心を持って自分からどんどん進んでやっていくような前向きな姿勢が大切です。私も海外では自分の思いが伝わるように何事も積極的にどんどんコミュニケーションしていますので、若い人にも頑張ってほしいです。

【市長】郡上で活躍しておられるみなさんに、郡上の若い人たちが続くことを願いたいと思います。

郡上出身の若い人たちはもちろんですが、郡上に魅力を感じて郡上に来られる人たちも、「我々と一緒にやろうよ」と、英語で言うと「Ｊｏｉｎ ｕｓ ｉｎ Ｇｕｊｏ」そんな地域づくりができればと思います。

新しい年がみなさんにとって良い年になりますように。今日はありがとうございました。